

# いつきの“ヒューマン・ビーイング”

## 人権について考える ⑭

### 土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

### 多様性ワークショップのはじまり

前号と前々号では、多様性ワークショップの実際について書きました。今号は、このワークショップを思いついた経緯について書くことにします。

時は10年ほど前にさかのぼります。2012年度末、ある担任から「発達障害が疑われる生徒がいじめられないように、人権学習でとりくめないだろうか」という相談がありました。当時は1年生1学期に、宇都宮さんという実在の骨形成不全の方を題材にした「風の旅人」というアニメを鑑賞したあと、障害者の自立生活や、それを阻む物理的なバリアをなくすユニバーサルデザインについて学ぶ授業を行っていました。2014年度は、それに代わって発達障害をテーマとした、新たな人権学習の教材をつくることにしました。

教材をつくった経験はそれまでにもありました。例えば担任をしていた頃、養護教諭からHIVの啓発パンフレットを渡され、「ホームルームの時間にひとことコメントして配布して」と言われたことがありました。しかし、いくらなんでもひとことコメントではダメだろうと思い、1時間の授業をすることにしました。さまざまな本を読み、考えた末、パンフレットはHIVについての知識を伝えるために使い、それに加えて、当事者の思いを紹介すればいいと考えました。その時、「今までやってきた人権学習と同じ構成だ」と気づきました。また、この教材をつくることを通して、HIVのとらえ方が感染予防から人権へと変化しました。それ以降、部落差別や沖縄人権学習など、さまざまな教材をつくってきました。それらに共通しているのは、「知識+当事者の思い」という構成でした。

しかし、発達障害についての教材をつくるにあたって、そうしたアプローチではダメな気がしていました。なぜなら、「発達障害についての知識」を得たとしても、それが発達障害のある生徒へのいじめを抑止することにつながらないのではないかという、漠然とした思いがあったからです。ではどうすればいいか。頭の中にはさまざまな「キーワード」が飛び交っていました。「障害の社会モデル」「障害は個性」「発達障害

は発達凸凹」「発達凸凹の友だちがつくったトリセツ」…。しかし、それらをうまくつなぎあわせるものはまったくありませんでした。そんなある日、突然気づきました。それは「ある個人にはさまざまな属性がある。にもかかわらず、ある文脈において、それらの属性のうちのひとつがとりあげられ、その属性によって評価される」ということでした。であるならば、その属性を可視化させる仕掛けをつくれればいいと考えました。その仕掛けとしてカードを使おうと思ったのです。

次に考えたのは、どのような属性を可視化させるかでした。発達障害を意識したカードは「空気を読まない／空気を読む」「時間を守れない／時間を守る」「ついしゃべってしまう／寡黙」の3枚のカードでした。その際、「空気を読まない」「時間を守れない」「ついしゃべってしまう」がネガティブに捉えられることは避けたいと思いました。しかし、そんな思いを青丹ゆきさんのかわいらしいイラストが吹き飛ばしてくれました。他にも、勤務校の生徒たちのセルフエスティームの低さが気になることから「自分が好き／自分が嫌い」のカードを、権利の不平等を端的に伝えるために「左利き／右利き」「女の子／男の子」のカードを、またゲーム的要素を加えるために、「ネコ派／イヌ派」のカードを加えました。

このようにしてできた教材が、はたして発達障害のある生徒へのいじめを抑止しているのかどうかは、実はわかりません。しかし、この多様性ワークショップは、3年間の人権学習のベースのうちの一つになりました。次にあげるのは、ある生徒の作文です。

今日のワークで、人それぞれに個性があるから今が楽しくいられるんだなと思いました。今いる人たちが同じ個性だったらとてもつまらないものになってると思うので、それぞれの個性を尊重して今を楽しく生きたいと思いました。

わたしの勤務校では、各学年で1回人権講演会をおこないます。次号は1年生の人権講演会のテーマである障害について書くことにします。